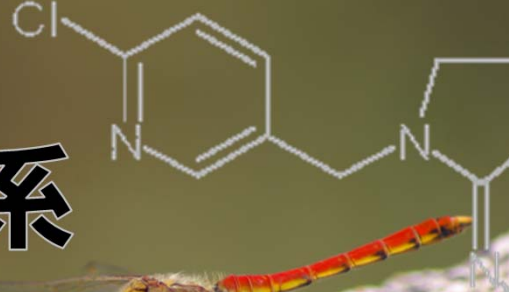


シンポジウム

ネオニコチノイド系 農薬の生態系影響



主催:公益財団法人 日本自然保護協会

協力:国際自然保護連合日本委員会

後援:日本生態学会、日本野鳥の会、WWFジャパン、ラムサール・ネットワーク日本

プログラム



■あいさつ 趣旨説明

「ネオニコチノイドとは」

高川 晋一(日本自然保護協会)

■基調講演

ネオニコチノイド系殺虫剤の生態系影響と『世界的な総合評価書 (WIA)』の公表

マーテン・ベイレフェルト・ヴァン・レクスモンド

(国際自然保護連合 (IUCN) 浸透性殺虫剤タスクフォース)

■事例報告 14:30~

「生態系サービスと農業、そしてネオニコチノイド」

マイケル・ノートン(欧州アカデミー科学諮問委員会/東京工業大学)

「長期フィールド調査から明らかとなったアキアカネの激減」

二橋 亮(産業総合研究所)

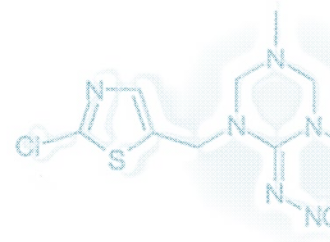
==== 休憩 15:10分ごろ ====

「ネオニコチノイド系農薬の生態リスク評価及び実態調査」

五箇 公一(国立環境研究所)

「農薬問題の解決に必要な視点」

本山 直樹(千葉大学名誉教授)



■パネルディスカッション 16:20~

■閉会 17:30

本シンポジウムは、アクト・ビヨンド・トラストからの助成を受けています

演者紹介



マーテン ベイレフェルト (Maarten Bijleveld van Lexmond)

WWFの国際事務局スタッフや国際自然保護連合の生態系管理委員長等を経て、2009年に浸透性殺虫剤タスクフォースの委員長に就任。以来、この化学物質の生物多様性、特にハチ類やチョウへの世界的な影響と、公衆衛生学的影響についての調査に精力的に取り組んでいる。



マイケル ノートン (Michael Norton)

東京工業大学特任教授。専門は化学、環境科学。ブリストル大学で学位を取得後、イギリス議会化学技術部部長、駐日英国大使館科学技術参事官、信州大学教授、東北大学教授などを歴任し現在に至る。欧州アカデミー科学諮問委員会の環境プログラム長として様々な科学レポートの取りまとめに尽力し、2014年にはネオニコチノイド系農薬に関するレポートを発行している。



二橋 亮

産業技術総合研究所 主任研究員。専門は昆虫学、進化生物学。東京大学で学位取得後、現職に至る。トンボを含めた幅広い昆虫を材料に研究を行っている。本シンポジウムでは、幼少のころから継続している富山県におけるトンボの長期フィールド調査の結果について紹介する。



五箇 公一

国立環境研究所主席研究員。農学博士。京都大学大学院を修了後、農薬メーカー勤務を経て現職に至る。主な研究分野は保全生態学・環境毒性学で、特に外来生物や化学物質による生物多様性への影響評価を進めており著書も多数。趣味は映画鑑賞、恐竜やSFキャラのフィギュア収集、CG製作など。



本山 直樹

千葉大学名誉教授。農学博士。名古屋大学大学院終了後、ノースカロライナ州立大学Ph.D課程留学。同大学客員教授、千葉大学教授を経て現在に至る。主な研究分野は殺虫剤の作用機構、農薬の健康・環境影響、松くい虫防除問題など。農水省農業資材審議会農薬分科会長、埼玉県農産物安全技術専門委員会委員長などを歴任。趣味は空手道、フィッシング、マラソン。



自然のちからで、明日をひらく。

日本自然保護協会

THE NATURE CONSERVATION SOCIETY OF JAPAN

ご支援のお願い

日本自然保護協会は、1949年に誕生した自然保護NGOです。全国2万人の会員に支えられ、政策提言・調査研究・環境教育の3分野から全国的な自然保護活動に取り組んでいます。自然を大切に思うあなたの力を貸してください。

Tel.03-3553-4101 ウェブサイト：<http://www.nacsj.or.jp/>